

## はしがき

山梨正明『認知文法論』(1995年、ひつじ書房)、吉村公宏『認知意味論の方法』(1995年、人文書院)、河上誓作編『認知言語学の基礎』(1996年、研究社)が刊行されて以来、この20年間あまりで日本語で書かれた認知言語学の書籍はかなりの数にのぼっている。入門概説書、研究書に加えて、大学教科書、用語辞典、演習書も出版されており、認知言語学の学習環境は、生成文法と比べても遜色がないくらい整ってきたと言える。こうした入門概説書が紹介する事例研究を通して認知言語学のおもしろさに惹かれ、大学や大学院で認知言語学を専攻するようになった学生は多いはずである。

その一方で、これまでの入門概説書・教科書は、道具立てや事例研究の紹介にとどまりがちであり、「認知言語学とは何か」「なぜこんなことを問題にするのか」といった問いに答えようとするものはあまりないように思われる。そのため、認知言語学が全体として何をどのように目指しているのかという問題意識が、学部学生はもちろんのこと、認知言語学を専攻する大学院生にも十分あるとはいいがたいのが現状である。その結果、プロトタイプ、メタファー、イメージ・スキーマといった用語を振り回せば認知言語学になると思われたり、しばしば論文に図が多く含まれることから「お絵描き」言語学のように揶揄されたりすることもある。さらには、「認知言語学者たちは、(中略)自分たちは認知の知られざる部分について何の発見をするつもりのないことを告白すべきであろう」(今井邦彦『言語理論としての語用論』2015年、開拓社、p.180)といった批判も招いている。

こうした現状は、認知言語学の裾野を広げるだけでなく、全体のレベルを上げていく上でも改善、打開する必要がある。このような観点から、認知言語学の基本をひと通り勉強した人なら誰もが抱くような11の疑問について「そうだ、あの先生にきいてみよう!」というわけで適任の認知言語学者に執筆を依頼して出来上がったのが本書である。

本書の位置づけとしては『認知言語学 基礎から最前線へ』(くろしお出版)の続編を意図している。認知言語学の「基礎」と「最前線」の間に横た

わる根本的な問題を探ることで、認知言語学の入門概説書をすでに何冊か読んだことのある学習者が自分の理解を整理し、最前線へ赴く準備となることを目指している。本書の各章は独立して書かれているので、興味のあるところから読み始めていただいて構わない。また、各章のタイトルの問いに対して各執筆者によって示された解答は決して唯一無二のものではない。読者は自分なりの解答を考えながら読み進めていただきたい。その上で「名著解題」に挙げた古典的な著作群にも挑戦して行ってほしいと思う。

本書の企画意図を理解し、出版を引き受けていただき、きめこまやかな編集作業をしていただいたくろしお出版の池上達昭氏に厚く御礼申し上げる。

最後になるが、本書は高橋英光先生の2018年3月末の北海道大学大学院文学研究科・文学部ご退職を記念して編まれたものである。認知言語学の分野における先生の長年にわたるご貢献に対する感謝の気持ちを込めて、本書を高橋先生に捧げる。

2018年4月  
編者を代表して  
野村益寛・森 雄一

## 目次

|  |              |
|--|--------------|
| 第1章 認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか？                        | 西村義樹・長谷川明香 1 |
| 第2章 認知言語学の文法観はどこが独自ののだろうか？                       | 野村益寛 23      |
| 第3章 認知言語学の意味観はどこが独自ののだろうか？                       | 松本 曜 45      |
| 第4章 認知言語学は語用論についてどのように考えている<br>のだろうか？            | 早瀬尚子 63      |
| 第5章 レトリックはなぜ認知言語学の問題になるのだろうか？                    | 森 雄一 89      |
| 第6章 文法化はなぜ認知言語学の問題になるのだろうか？                      | 大橋 浩 113     |
| 第7章 コーパスを利用することで認知言語学にとって<br>何がわかるだろうか？          | 長谷部陽一郎 135   |
| 第8章 認知言語学は言語普遍性、個別言語の特殊性について<br>どのように考えているのだろうか？ | 岡田禎之 157     |

|      |   |      |     |
|------|---|------|-----|
| 第9章  | 認知言語学は言語習得・言語進化についてどのように<br>考えているのだろうか？ | 大堀壽夫 | 179 |
| 第10章 | 認知言語学はヒトの認知について何かを明らかにした<br>のだろうか？      | 本多 啓 | 201 |
| 第11章 | 認知言語学はどこへ向かうのだろうか？                      | 高橋英光 | 223 |

## 索引

## 名著解題

|   |  |   |     |
|---|--|---|-----|
| ① | Ronald W. Langacker                            | <i>Foundations of Cognitive Grammar</i>   | 21  |
| ② | George Lakoff and<br>Mark Johnson              | <i>Metaphors We Live By</i>   | 42  |
| ③ | Charles J. Fillmore                            | <i>Form and Meaning in Language</i>   | 60  |
| ④ | Adele E. Goldberg                              | <i>Constructions: A Construction<br/>Grammar Approach to Argument<br/>Structure</i> | 86  |
| ⑤ | 佐藤信夫   | 『意味の弾性』   | 110 |
| ⑥ | Paul J. Hopper and<br>Elizabeth Closs Traugott | <i>Grammaticalization</i>   | 132 |
| ⑦ | Joan Bybee                                     | <i>Morphology: A Study of the Relation<br/>between Meaning and Form</i>             | 155 |
| ⑧ | 池上嘉彦   | 『「日本語論」への招待』  | 177 |
| ⑨ | Michael Tomasello                              | <i>The Cultural Origins of Human<br/>Cognition</i>                                  | 198 |
| ⑩ | Leonard Talmy                                  | <i>Toward a Cognitive Semantics</i>   | 221 |

## 第1章

---

# 認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか？

西村義樹・長谷川明香

### 1. 本章の目的

理論言語学の世界では、1950年代半ばにチョムスキー (Noam Chomsky) の創始した生成文法 (generative grammar) が現在に至るまで主流を形成してきた。その生成文法と対立するいくつかの枠組みがゆるやかに合流した一種の理論的共同体として1980年代半ばに出現し、現在では生成文法と並ぶ一大潮流に発展しているのが認知言語学である<sup>1</sup>。こうした成立の経緯を考えれば容易に想像がつくように、認知言語学の特徴の多くはこの理論と (少なくとも1980年代半ば頃までの) 生成文法との主要な対立点に見出すことができる。

認知言語学の特徴は、その名称からして、ヒトの認知 (心の仕組み) の一環として言語を捉える——言語の使用を可能にする (大部分が意識化されることのほとんどない) 知識の解明を目標とする——ところにあると思われるかもしれないが、実はこの特徴だけでは認知言語学を生成文法と区別することはできない。それどころか、この目標はこの2つの理論に共通の特徴なのである。生成文法はいわゆる「認知革命 (cognitive revolution)」の原動力となった理論の1つであったと一般に考えられているが、それはこの理論が言語知識 (言語能力とも呼ばれる) とは何かを明らかにすることを当初から目指してきたからに他ならない。その生成文法と対立する理論として登場したのが認知言語学なのであるから、後者の名称に含まれる「認知」という表現には、単に言語知識の解明という目標以上の意味が込められているはずで

---

1 本章には西村・長谷川 (2017) および西村 (2018) と重複する箇所がある。

## 第2章

# 認知言語学の文法観は どこが独自ののだろうか？

野村益寛

### 1. はじめに

ことばを学ぶには辞書と文法書が必要だと言われる。辞書で単語を覚え、それを文法書で説明されている諸々の規則に従って活用させたり、組み合わせたりすればよいというわけである。これは、英語をはじめとする私たちの外国語学習の経験に照らしても、もっともなことのように思われる。では、そもそも単語に加えて、文法というものがなぜ必要なのだろうか？

幼い姉と弟がクレヨンで一緒にお絵描きをしている。弟が姉に向かって「青いクレヨン、おわたたらかして！」と言ったとしよう。なんということもないことば使いだが、「青いクレヨン」という表現が「青い」という形容詞と「クレヨン」という名詞から成り立っていることに注目しよう。このように形容詞と名詞を組み合わせることなく、〈青いクレヨン〉という意味を一語で表すことは可能だろうか？もちろん、可能である。仮にそれを「ネクキ」ということにしよう。さて、同じことを〈赤いクレヨン〉、〈黄色いクレヨン〉・・・についても行い、それぞれ「クハニ」、「ウノサ」、・・・と名づけるとする。そうするとどうなるだろうか？クレヨンの色の数だけ、新しい語が必要となる。同じことを色鉛筆や色紙についてもおこなうと・・・。

このように、私たちが表現したいと思う物や事柄の数には限りがない。一方、私たちの記憶の容量には限界があり、無限はもちろんのこと、何兆、何億、あるいは何千万といった数の単語でさえ記憶するのは難しい。また、私

## 第3章

# 認知言語学の意味観はどこが独自ののだろうか？

松本 曜

### 1. 認知言語学の意味観

認知言語学における意味論、つまり認知意味論とは、Fillmore (1975) を出発点として、Lakoff and Johnson (1980, 1999), Lakoff (1987), Langacker (1987, 1988), Sweetser (1990), Talmy (2000) などを通して発展してきた一連の意味論を指す。この認知意味論は、言語表現の意味についてどのように考えるのだろうか。そしてその意味研究は、認知意味論以前の（あるいは近年の認知意味論以外の）意味研究とどこが異なるのだろうか。

意味とは「言語形式が伝える内容」である。話者はことばを発することによって、何らかのメッセージを聴者に伝える。それが意味である。問題は、その「言語形式が伝える内容」が、どのような性質のものなのかである。これに関して、認知意味論は三つの点で特徴的な考え方をする。それは、1) 意味が認識主体による概念化の産物であり、2) 認識主体が持つ、指示対象に関する百科事典的知識を背景とし、3) 認識主体の持つ身体的特徴、生活環境、社会性などに動機付けられている、と考える点である（松本 2003 を参照）。

このような意味観は、1970年代まで英語、ドイツ語、フランス語圏で主流であった、構造主義的な意味論に対する代案として産み出されたものである。構造意味論は、音韻論などで成功を取めた構造主義の考え方を意味論に持ち込んだもので、語の意味を語と語の対立という観点から捉えようとした。たとえば、girl という語の意味は、それが boy や woman とどのような点で対立しているかを考察することによって明らかにされる、という考え方である（たとえば Greimas 1966, 国広 1967, Lehrer 1974, Leech 1974,

## 第4章

---

# 認知言語学は語用論について どのように考えているのだろうか？

早瀬尚子

### 1. はじめに

認知言語学は、さまざまな区別について、その線引きが厳然と存在するものではなく恣意的なものであり、実は連続体を成すと考える。たとえば、言語を意味と形式が対応した記号とみなすことから、形態論と統語論の区別も連続していると考え、言語的知識と百科事典的知識の区別も明確にはつけられず関連しあうと考えている (Haiman 1980)。同様に、言語表現の意味がどのような形で得られるかを扱う意味論と、どのような意図で用いられ、また受け取られるかという語用論との線引きも明確には引けないものと考えている (Langacker 1987)。

これに対し、語用論という分野をその専門として研究を進めている理論は、認知言語学とは別にしっかりと存在している。一口に語用論といっても、その射程は大変広く、興味関心も様々なものがある。談話分析や会話分析を通じてコミュニケーションにおけるルールやパターンを探ろうとするアプローチもあれば、社会言語学や心理言語学、マルチモーダルな研究分野においては言語に限定されずジェスチャーなど身体的な側面や視線、参加者の関係性や空間的位置取りなど、幅広い要素を考慮する広い意味でのコミュニケーションを研究対象とするものも多い。そのような研究においては、明らかにしたい研究対象が、コミュニケーションの総体であって、必ずしも「言語」ではない。つまり、語用論領域の中で、言語に焦点を当てている研究は、現状ではむしろ少数だと認識すべきである。広義の語用論とは、言語学だけで



## 第5章

# レトリックは なぜ認知言語学の問題になるのだろうか？

森 雄一

### 1. はじめに

言語表現には人間の事態の捉え方が関わる。認知言語学の基本的な出発点は、この考え方に集約される。人間が事物や事態をいかなる形で把握 (construe) するか、またそれが言語表現としてどのように現れているかを探究することはきわめて重要である (☞第3章)。その関わり方は、さまざまな形で現れ、認知言語学の探究も広範に渡っているが、本章ではレトリックに現れた認知の反映という観点から論じていく。レトリックとは、効果的な伝達や美的効果のために用いられる言語技術であるが、その効果を生じさせるために、人間のものの見方の仕組み (認知機構) が利用されることがある。また、レトリックが言語のなかに定着することで、人間のものの見方が影響されることもある。このようなことから、人間のものの見方 (認知) と言語の関係が、認知言語学の本質である以上、レトリックは、認知言語学のなかで重要な位置を占めるものであると言えよう。以下、2節において比喻について認知言語学との関わりのなかで述べる。比喻研究は認知言語学の研究パラダイム成立以降、その中心でありつづけてきたが、レトリックと認知言語学との関係は比喻にとどまるものではない、3節においては視点と関わるレトリック、4節においてはカテゴリー形成に関わるレトリック、5節においては「主体化」・「客体化」に関わるレトリックについて説明し、レト

## 第6章

# 文法化は なぜ認知言語学の問題になるのだろうか？

大橋 浩

### 1. はじめに

まず、次の文を見てみよう。

- (1) a. John will win the match.  
b. You might be right.
- (2) a. Where there is a will, there is a way.  
b. Might is right.

Will と might は、(1) の文では助動詞としてそれぞれ「予測」や「推測」を表している。一方、(2) のことわざでは名詞として「意志」と「力」という意味を表している。ふたつの will と might は別の語、つまり、同音異義語なのだろうか、それとも何か関係があるのだろうか。実は現代英語の助動詞は古英語時代 (5 世紀～12 世紀) の本動詞が変化したもので、「意志」や「力」という意味は、will や may が本動詞として表していた意味の名残なのである。では、どのような変化を経て助動詞となったのだろうか。そのような変化は他の品詞でも起こるのだろうか。また他の言語でも起こるのだろうか。もし起こるとしたら、そこには共通点があるのだろうか。

本動詞から助動詞への変化は文法化 (grammaticalization または grammatization) とよばれる変化の 1 例である。文法化の研究には長い歴史があるが、「文法化」という用語自体はフランスの比較言語学者 Meillet が 1912 年に発表した論文で最初に使われたと言われている。その後文法化研究は特

## 第7章

---

# コーパスを利用することで 認知言語学にとって何がわかるだろうか？

長谷部陽一郎

### 1. はじめに

言語データが集積されたものを意味する「コーパス」という語は広く日常的な場面に浸透してきている。書店の語学コーナーでは辞書や参考書の宣伝文句として「コーパス・データを活用」といった表現をよく目にする。また近年は音声認識や自動翻訳システムが実用レベルに達しつつあるが、それらが膨大なコーパス・データを用いて開発されていることはよく知られている。時代の流行語とも言える「コーパス」であるが、認知言語学でコーパスを用いると何がわかるのだろうか。この問題について現時点での指標を示すことが本章の目的である。

コーパスという語はもともとラテン語で「身体」を意味する。また、これを語源とする現代英語の *corpus* には「人や動物の死体」という意味がある。認知文法におけるグラウンディング (grounding) の概念が表すように、本来、言葉は話し手や聞き手の「いま・ここ」と結びついて初めて成立する。そう考えると、コーパスの一部として電子媒体に記録された言葉たちは、話し手や聞き手の「いま・ここ」から切り離された「言葉の死骸」と言えなくもない。

ではコーパスを用いることは、いきいきとした言語使用の背後にある構造を探る認知言語学の理念と矛盾するのだろうか？ そうではない。適切に扱う限りにおいて、コーパスからのデータは人間の言語使用の重要な部分を明らかにしてくれる。ときにそれらは、これまで気づかれなかった言語的事実に

## 第8章

---

# 認知言語学は言語普遍性、個別言語の特殊性 についてどのように考えているのだろうか？

岡田禎之

### 1. はじめに

言語には共通性と個別性があり、様々な言語に普遍的に認められる特性 (language universals) と、特定言語がもつ特性 (language particulars) があると考えられる。主に、言語類型論 (linguistic typology) と呼ばれる領域で研究されることが多い問題だが、これは生成文法の研究でも盛んに取り上げられてきた話題である。表面的には全く異なる様々な言語の裏に普遍的に認められる特性は何か、同時に表面的に異なる言語の、その違いを生み出しているものは何か、という課題に対して、生成文法では普遍文法の存在を仮定し、変数や素性構成の違いによって言語間の差異が生じるというシステムを構築する。たとえば、主要部とその補部の線形順序が言語間で異なることは、「±主要部先行 (±head-initial)」という変数設定によってとらえられ、ある要素の移動が可能であるかも特定の素性が存在するかによって説明づけられたりする (☞第9章)。認知言語学の世界では同様の体系性が認められるかといえば、まだそのような状況には至っていないだろうと思われる。これには良い面と悪い面があると思われるが、既に与えられた視点に縛られることなく道具立てを自由な発想に基づいて提案し、当該の言語現象に最適と思われる解法を得られる可能性があること、言語観察から得られる様々な段階性をより自然に捉えやすいことなどは、プラスの面と考えることができると思われる。一方で、認知能力や言語使用に依拠して言語を探求しようとする認知言語学にとって、研究者の多くが共有できるプラットフォームを構築

## 第9章

---

# 認知言語学は言語習得・言語進化について どのように考えているのだろうか？

大堀壽夫

### 1. 序論

言語の習得と進化は、ともにヒトの心の本質とかがわる興味のない問いを私たちに提示する。新生児はどのようにして言語を使えるようになるのだろうか？ そして生まれた時、頭の中はどのような状態になっているのだろうか？ これらの問いは、多くの興味深い研究を生み出してきた。さらに、現代のヒトが進化の中でいつ、どのようにして言語を獲得したのかという問いは、最近になって新たに注目を集めている。本論考では、認知言語学の観点から、2節で言語の習得について、3節で言語の起源と進化について考える。いずれにおいても、言語を自律的なモジュールと見るのではなく、さまざまな認知能力——その中のあるものは人に固有であり、あるものは他の動物も共有する——との関連において見ようとする点が、認知言語学の特徴である。以下の議論は理論的な考え方の検討を主とする。個別の事例研究については参考文献をあたられたい。

### 2. 言語習得

#### 2.1 基本的な立場

まず、言語の習得については「通説」の地位を得ている生成文法の考えを見る（例えば Cook and Newson 2007）。生成文法は言語習得についての「プラトンの問題」から理論が発している。健全な人間ならば、刺激の貧困 (poverty of stimulus) にもかかわらず、いかなる言語でも母語として習得

## 第10章

---

# 認知言語学はヒトの認知について 何かを明らかにしたのだろうか？

本多 啓

### 1. はじめに

本書の他の章でも述べられているように、認知言語学は人間の言語能力を言語に限定されないさまざまな認知能力に動機づけられたものとして明らかにしようとしている。これとの関連で認知言語学者からは次のような発言がなされている。

…認知言語学は昔ながらの伝統を復活させた。この伝統に従えば、言語は意味を編み出し、それを伝達する役割を担っており、言語学者と認知科学者にとって、言語とは精神・頭脳の中を知るための覗き窓の役を果たしているのである。

(Fauconnier 1999: 96; 訳は今井 2015: 139, 163)<sup>1</sup>

他方でこれに対して次のような批判もなされている。

ひるがえって認知言語学は、フォーコニエが[上記引用]で「窓」の存在を明言しているにもかかわらず、何の発見もしていない。すでに言ったように、自動車や電車の窓から見える物の「共通性」について理論めいたことを呟いているだけである。認知言語学者は、よろしく、フォーコニエの「窓」発言を取り消し、自分たちは認知の知られ

---

<sup>1</sup> 今井 (2015) の原文には Fauconnier (2000) とあるが筆者 (本多) が参照したのは Fauconnier (1999) である。

## 第11章

# 認知言語学はどこへ向かうのだろうか？

高橋英光

### 1. はじめに

認知言語学はどこへ向かうのだろうか。認知言語学の将来を占うことは容易ではない。というよりは不可能であろう。しかしどこへ向かうべきかを考えることは可能である。このテーマを考える上でそもそも言語学は何のためにあるのか、なぜ言語研究は大切なのかについて一言触れておきたい。

人類の誕生は700万年ほど前と言われるが(鎌田 2016: 207)、人類の初期の歴史のうちでもっとも重要なできごとと言語、宗教、農耕とお金の発明と言われる。言語の登場は6万年前から20万年前の間(Berwick and Chomsky 2016)ともおよそ100万年前(眞 2012)とも言われ、宗教は数万年前、農耕の開始は紀元前1万年頃、お金の登場は紀元前7世紀頃と推定されている。もしこれらの推定が正しいならば言語は人類最古の重要な発明ということになる。はじめに言語がなければ宗教も農耕もお金も発明できなかったであろう。そして人類の運命を決定づけたこれらの4つの発明を私たち人間は長い間、学問として研究し続けている。これらの成り立ち、変化の過程、そして根本的メカニズムの解明は人間についての深い理解をもたらすのみならず人間同士や民族間に起こる問題を解決する糸口ともなる。

では言語学はどれくらい言語を明らかにしたのだろうか。宗教学が宗教を、農学が農耕を、経済学がお金を明らかにしたのと同じくらい明らかにしたのだろうか。あるいは言語学の研究はもっと進んでいるのだろうか。逆に遅れているのだろうか。認知言語学という学問が1980年代に初声をあげたきっかけは言語学の現状への大きな不満・危機感にあった。それは、言語学が言語の本質を少しも明らかにしていないのではないのか、言語学がどこかで